

談話室

タイ奮闘記—予告編—

石井 武比古 (タイ王国国立放射光科学研究所・スラナリー工科大学)

私がタイ王国の放射光科学研究計画に関わりを持ってから、既に、8年の歳月が経過している。話が本格化したのが1996年のことで、国家プロジェクトとして、放射光科学研究計画(NSRP)がスタートしたのが、同年の3月である。私は、計画の発足と共に、非公式ながら、タイ王国科学技術環境省の雇われの身となった。定年退官してから1年が過ぎようとしていたのに、密かに、仕事場としての物性研究所に居残っていて、

「さて、これから計画をどのように進めたら良いか?」、などと、いろいろ案を練ったり、友人に助けってもらったり、日本の関係者に事情を聞きに行ったりしていた。

NSRPというのは、当時、つくばのSORTEC研究所にあった1.0 GeVのストリーミングとその入射器系を貰い受け、タイに持って行って、放射光実験施設を作ろうというものであった。私とその可能性を示唆した時、居合わせた欧米、中国の先生方が強く反対した。その理由は次のようなものである。

(1) タイ王国では、科学研究の基盤が整備されておらず、研究者の層も薄い。従って、放射光実験施設のような先端的设备を導入するのは時期尚早である。今は、じっくりと研究基盤を整備することが重要であり、全国の研究者の学術的レベルが十分に高くなってから、先端的研究施設の導入を考えるべきである。今、まとまった研究費があるなら、それを全国の研究者に配分し、配分を受けた研究者がそれを使って研究の腕を磨くようにすべきである。

(2) タイ王国で放射光実験施設を作る時には、最先端の設備を作るべきである。SORTECリングは保守的である。

私は、この種の議論を展開した人達の中で、その時点でのタイ王国の内情を知っていた人は殆どいなかったのではないかと疑っている。失礼な話ながら、多くの人が特定の意見に付和雷同したのではなかったか、と思うのである。

この国は奥が深く、3年付き合っても、まだ、良くわからない。タイ王国の計画推進派の人達は、(1)の論法に従っていると、10年経っても、20年経っても、計画をスタートすることが出来ないであろう、と言う。だから、まず、計画をスタートさせて、それをバネにして、研究環境の閉塞状態を打破するのだ、と言うのである。

研究費のばらまきは、言わば、科学研究費配分的な国の研究費支出である。放射光研究計画は、中央に一つ、共同利用研究所を作ろうとするものである。科学研究費の増額をしてボトムアップを計るのか、先端的共同利用研究所を建設して、トップアップを計るのか。一見すると、話はそういう議論に似ている。しかし、実際には、こちらの事情は、日本型のそういう議論から想像されるものとは、大きな相違がある。こちらでは、研究費を人件費に使うことが出来て、その範囲が明確でないために、研究費が研究者の給料の補助になってしまう可能性がある。大きな相違とは、人々が、研究費を食べてしまったり、旅費に使ったりして、研究費が消えてしまうことが起こり得るのことを指す。これは、研究費が研究者を雇うための経費を含む、欧米に見られる研究費配分とは、似て非なるものである。

(2)のうちで、SORTECリングが保守的かどうかについては、議論の分かれる所である。この加速器は、蓄積電流が1 Aに達する記録を持ち、ビームの寿命も長く、電子ビーム打ち込みも容易な、使い勝手の良いマシンであった。ただし、このマシンは、マイクロソングラフイーの研究に最適化されていたので、一般的な科学研究を行うためには、リングを改造した方が良かった。私達は、磁石格子をFODOの変形されたようなもの(quadrupole doublet)から、DBA格子に変えることにした。同時に4個所の長直線部を設けた。これにより、周長は約2倍になり、エミッタンスは1/7に下がった。そして、挿入光源を設置できることになった。7 Tの超伝導磁石ウィグラーを入れて、X線が出せることもわかっている。

さて、この国の人達と付き合うようになってから、「文化の違い」というものを身を以って知ることになった。最初は大いに戸惑ったが、慣れてくると、こちらでのライフスタイルを鏡にして、日本人の生き様を眺めることになり、良い意味でも、悪い意味でも、日本を知る良いチャンスになったと思っている。

この文章を読んで下さっている諸兄姉は、かつて、熾烈な受験戦争を戦った経験をお持ちであろう。しかし、人の親となって、我が子の“お受験”をハラハラ、ドキドキ、時には怒り心頭に発しつつ眺めた(やらせた?)方も多いのではないだろうか。そのような経験をお持ちの方なら、きっと、この世には、二つの異なった性格を持つ二種類の

人間が存在していることを理解出来るであろう。

その第一は、まず勉強する(仕事をする)、それから遊ぶ(余暇を楽しむ)、という性格の人間である。こういう性格の人は常に多忙である。次から次へと仕事が舞い込んできて、それを片付けるのに汲々としていて、休む間がないのである。その第二は、まず遊ぶ(ゆったり過ごす)、それから勉強する(仕事をする)、という性格の人間である。子供の場合、親の目には、その子が怠け者に見える。

タイ王国にいと、この国のマジョリティーが第二の部類の人間で占められているように見える。先日、バンコクで、アジア大会が開かれた。その少し前に、日本の新聞に次のような内容のことが書いてあった。

「タイでは、経済状態が良くないので、大会の準備が遅れている。これで間に合うのだろうか？」

しかし、この見解は若干見当違いなのである。この国の人は、デッドラインがギリギリに迫るまで、仕事を始めない。

「明日ありと、思う心の仇桜、夜半に嵐の吹かぬものかは」

という概念はないように見える。嵐が吹くことなど気にしないのである。

こちらには、“バンコク週報”という日本語の新聞がある。私にとっては貴重なニュースソースである。ある時、そこに興味ある記事が掲載されていた。

「この国には、ハウレンソウがない」というのである。一瞬、

「そう言えば、スーパーでも、市場でも、ほうれん草は見かけないよなぁ」

とってしまった。次を読むと、ハウレンソウとは、報告、連絡、相談のことなのだそうである。これは然り。この国の人はハウレンソウが苦手である。私はこれに悩まされることが多い。

「それを言うなら、日本にだって、ハウレンソウの嫌いな人がいるよね」

と私の友人が言った。

私達が“サイアムフォトン計画”と名付けたタイ王国の放射光研究計画では、人材育成が大きな柱になっている。かつて、“野球道”と言った大監督がおられたが、私達の言う人材育成とは、“放射光道”の類の話ではない。この

国の基礎科学の分野には、本当に人材が少ないのである。いろいろな奨学制度を設けて、既存の研究者を呼び込むよりは、はじめから、若い人を教育していくことの方が手取り早いと思うこの頃である。

しかし、この教育訓練というのがなかなか大変なことである。私達は、今、日本の大学と交流協定を結び、大学院教育を充実させようとしている。私は、研究者がいなければ、研究設備を作れないのか、研究設備がないから、研究者が育たないのか、という鶏と卵の関係の議論を続けるよりは、この交流計画によって、より具体性をもった、実効性の期待できる教育訓練が出来るものと信じている。

これまで、いろいろやってきて、日本製品の価格が高いのを身を以て体験した。私達はそもそも初期条件からして、日本製品を使わねばならない宿命を負っていた。この経緯を考えて、ことを少し大袈裟に言うなら、日本の工業製品は、一部の大量生産品を除くと、国際競争力がかなり低いのではないか。このまま行くと、大変具合の悪いことになりそうである。今の私には何でそうなるのか分からないし、まして、解決の手段など知る由もない。しかし、

「これぁ、ヤバイよ」

ということは言える。本当にそうなのである。日本の研究者の皆様も無関心でいられない筈であるが、皆さんはどのように考えられますか。

最後に全く別の話。果糖というのは非常に肥満の原因になるそうである。我が家の庭にバナナとパパイヤが何本かあって、食べきれない。間もなく、法律上の老人年齢、65歳、になろうというのに、167cmの身長に、何時の間にか、75kgの脂と贅肉がついてしまった。これは大変具合の悪いことである。我が家を訪れた友人達は愚妻に強制的にパパイヤを持たされるという困ったことが起こっている。

タイ奮闘記というのは編集者からいただいたタイトルである。奮闘記などというのは、自分から言い出すことではない。それに、短い紙面では、それは書けない。そこで、予告編ということにした。本編は、いずれ機会を得て、延々と書いて見たい。自ら言い出す奮闘記とは、愚痴をこぼすことであるから、愚痴こぼしの記とでもした方が良いのかも知れない。

(1999年3月)